

僕の気持ちは複雑だった

一時四十分頃、家路につく。

帰り、西京極の駅で、電車を待っている時、顔に気持ちいい風を感じながら、北山を眺める。

はるか遠くに 左大文字が
建ち並ぶ家々のすきまから、小さく見える。

学校の近くからなら、いつも、
こんもりと大きく見える衣笠山も、
ここからは、小さな丘のようである。

背後に 大きく どかっと、
名の知れぬ、京都の北の山々が
ひっかまえている。

日光は 山を輝かす。
青空は 山のどす黒い緑を
きれいな緑に変える。

静かに じっと見ていたら
気持ち が スーと 快く感じ、
歌でも 歌いたくなり、
思わず、声が出た。

しかし、近くに 人がいた。
気が付き、びっくりして黙り込んだ。
まぶしい。